

函嶺洞門の整備



昭和6年 建設当時の函嶺洞門

洞門

大正12年の関東大震災で国道1号は各地で土砂崩れや橋の崩落など、大きな被害を受けました。

この復旧と併せて小田原土木センターの前身である小田原道路改良事務所により、道路を土砂災害から守る施設として昭和6年に函嶺洞門かんれいどうもんが造られました。

函嶺

「函嶺かんれい」とは、中国河南省の関所「函谷関かんこくかん」に由来する「箱根山」の異称です。

“箱根の山は天下の険 函谷関も物ならず”

(瀧廉太郎作曲「箱根八里」)



意匠

函嶺洞門のデザインは、箱根の玄関口として来訪する欧米人を意識し中国の王宮を模しています。胸壁は階段状に、表面は花崗岩と異形タイルをあしらい、光を取り入れる柱形式から当時は“開腹隧道”と呼ばれました。



昭和5年 北伊豆地震による被害の様子

災害

建設当時の昭和5年、神奈川県と静岡県を跨ぐ広い範囲を北伊豆地震が襲いました。函嶺洞門の現場は土砂崩れに見舞われ、推定2.5トンもの落石の衝撃で一部の区間が他より5度傾きました。今でもそのズレが確認できます。



北伊豆地震の爪痕

塔之澤方面の坑口横にあるお地蔵様は、函嶺洞門が整備される前、関東大震災の時にこの付近で発生した土砂崩れにより亡くなられた方々の鎮魂のためのものです。